

小金井の樹木の倒木は7倍！

(2018年台風24号)

～玉川上水の野草と桜並木 高槻成紀先生～

「玉川上水 花マップ」ブログ2020.3.8より 抜粋

■小金井で見た無残な伐採

私は小金井の玉川上水を見て驚かないではいられなかった。

前から小金井の玉川上水は明るく桜が多いとは思っていたのだが、今回(2020年3月)訪れたとき、ケヤキの大きな木が軒並み伐採されていたのを見て私は心が痛んだ。根元を見ると玉川上水の壁に根を張り、特有の生え方をしている。切り株の直径は50cmほどはあったから、樹齢は優に100年を超えているはずだ。これらの木は私たちより早く生まれ、太平洋戦争も見てきたのだ。あるいは明治維新をも見ているかもしれない。それが21世紀になって無残にも伐り尽くされた。

こうした伐採は小金井の広い範囲に及んでいた。ほとんど裸地になっている場所もあった。こういうところには雑草でさえ入りにくい。風で種子散布をするタンポポやススキなどの種子が飛来し、

一部のものがかろうじて発芽する程度であろう。玉川上水に多い、草原生の野草であるアキカラマツ、シラヤマギク、ツリガネニンジン、オカトラノオなども生育は絶望的である。ましてや雑木林の下に生えるナイーブな「たまゆら草」*はこの直射日光の当たる環境では全く生育することはできない。

*たまゆら草：春の短い期間だけ葉を出し花を咲かせその後は姿を消して、長い間中で過ごす草花
＜高槻先生の造語＞



小金井で見たケヤキの伐採痕 (2020.3.5)

■桜の花見と野草

私は伝統的な花見はよいことだと思う。人々が春の到来を喜び、桜を見ながら野外で集って楽しむのは素晴らしい伝統と言えるだろう。その自然を愛でるという精神からして、100歳以上の樹木を伐りつくすことは相反することにならないだろうか。

玉川上水は、もともとの目的は江戸市民の生活水の確保であり、紛れもない生活に必要であった人工的な構造物である。小金井では花見を楽しんだが、そのほかのほと

私たち《こだま》は、「玉川上水花マップネットワーク」(代表：高槻先生)による2018年の台風24号の影響について玉川上水の樹木の風害の実態調査に参加しました。

その調査結果によると、小金井市域では27本の風害木があり、そのうち20本(74%)が桜、ケヤキは4本だけでした。小金井の樹木の倒木率は、他の地域より7倍も多かったのです。小金井地区ではサクラ属以外の樹木を伐採する管理をしているため、樹木密度が低くなり、少数の太いサクラ属が風圧を強く受けます。その結果風害木は圧倒的に桜に偏った、との小金井の特異性も示されました。風害の実態調査の中でこれらを指摘した高槻先生の論文が、専門誌「植生学会誌」に受理されました。これは主張が学術的に認められたことを意味しています。

高槻先生のブログでは、『自然をめぐるという精神と、100歳以上の樹木を伐りつくすことは相反することにならないか』、『桜優先型の「小金井方式」の管理が小金井の外側にまで拡大されはしないか』と、疑問と警鐘を投げかけておられます。ご本人の承諾を得て、抜粋をご紹介します。

んどは水質管理のために草刈りをして維持された。しかし、戦後はむしろ緑地としての機能を持つようになり、木々が育ち、特に高度成長期に急速に失われていった武蔵野の雑木林のレヒュージア(避難所)として野草を保全する空間としての価値が高い。桜の花見という年に一度の行楽とは違い、四季折々の自然に接する喜びを楽しむ人の方がはるかに多い。

ただ、それでも私は小金井に桜並木があることは尊重したいと思う。というのは、部分的に上木を伐採することは草原的な野草の復活に有効であり、異なる樹木管理がなされていることが、全体として玉川上水に森林と草原の野草が生きる多様な環境を創成していると考えからである。

いずれにしても重要なのは「桜が雑木か」といった粗雑な議論ではなく、人も野草も小さな生き物も全て地球に共に生きる仲間であるという価値観にたち、そのような視点で玉川上水をいかに管理するかを考え、計画を立て、市民とともに実行してゆくことである。

■玉川上水にとっての伐採

私が懸念するのはこの桜優先型の「小金井方式」の管理が小金井の外側にまで拡大されはしないかということである。繰り返すが、もしそのようなことになれば、少なくとも数万年という長い時間を世代を引き継いできた森林生の野草の息の根をとめることになるのだ。長い年月を生き伸びてきた野草を、桜の花見を目的に消滅させるという愚を他地域にまで拡大することは、私たちに続く世代に対してしてはならないことだと思う。

高槻成紀先生：現在麻布大学「いのちの博物館」上席学芸員 専門は生態学